

「第46期はなやまボランティアスクール」報告書

1. 趣旨

国立青少年教育振興機構が定める「法人ボランティア養成カリキュラム」に基づき、ボランティア活動に必要な理論と技術についての実践的な研修を行い、ボランティア活動に積極的に取り組む意欲を高める。

2. 事業の概要

(1) 期日 令和7年5月17日(土)～5月18日(日)【1泊2日】

(2) 参加者

①参加対象 ボランティア活動に興味関心を持つ方(一般の方・学生・高校生) 50名程度

②参加人数 36名(高校生20人、大学生14人、社会人2人)

	10代	20代	計
男	8	1	9
女	21	6	27

3. 企画運営のポイント

- ・先輩ボランティアや他の参加者と関わる機会を多く設定し、縦(先輩&スタッフ)と横(同期ボランティア)のつながりを作るようにした。
- ・ボランティアに必要な知識や技能を体験的な活動を通して身に付けさせるようにした。
- ・先輩ボランティアの経験談を聞いたり、プログラムの企画をしたりして、実際のボランティア活動を具体的にイメージできるようにした。

4. 日程 「法人ボランティア養成カリキュラム」科目名で記載

	午前	午後
5/17 (土)	<開講式> 10:00 <講義> 10:00～11:00 「青少年教育施設の現状と運営」 〔講師〕 国立花山青少年自然の家 所長 <講義・演習> 11:00～12:00 「青少年教育施設におけるボランティア活動」 〔担当〕 国立花山青少年自然の家 職員	<講義・演習> 13:30～15:30 「安全管理」(救命救急、応急処置) 〔講師〕 栗原市消防本部 署員 <演習> 15:30～19:30 「ボランティア活動の技術」「安全管理」(野外炊事) 〔担当〕 国立花山青少年自然の家 職員 *情報交流会(焚き火)

	午前	午後
5/18 (日)	<講義> 9:00～10:30 「ボランティア活動の意義」(先輩の話) 〔担当〕 国立花山青少年自然の家 職員 先輩ボランティア <講義・演習> 10:30～12:00 「青少年教育」(プログラムを企画してみよう) 〔担当〕 国立花山青少年自然の家 職員	<演習> 13:00～14:30 「ボランティア活動の技術」 (プログラムをやってみよう) 〔担当〕 国立花山青少年自然の家 職員 <説明> 「登録制度について」 〔担当〕 国立花山青少年自然の家 職員 <閉講式> 15:30

5. 主な活動内容

① 講義「青少年教育施設の現状と運営」



② 講義・演習 「青少年教育施設におけるボランティア活動」



③ 講義・演習「安全管理」(救命救急)



④ 演習「ボランティア活動の技術」「安全管理」



⑤ 講義「ボランティア活動の技術」(先輩の話)



⑥ 講義・演習「青少年教育」「ボランティア活動の技術」



6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：97.2% やや満足：2.8% やや不満：0.0% 不満：0.0%

(2) 参加者の声

- ・初めての方との交流でき、とても満足いく活動だった。子供の教育や体験の必要性を知ることができ、野外活動では班で分担し、会話することで交流を深め、充実した二日間を過ごすことができた。
- ・ぜひボランティア活動に参加して、子どもたちと沢山接し、ボランティア同士でもっと仲を深め、様々な情報を交換していきたい。

(3) 成果

- ・活動ごとにグループ編成を変え、人と関わる機会を多く設定したことは、「自分にはない知識や技能を他人と接して気付くことができるいい機会になった」「先輩方ともっと仲良くなりたい」との感想からも分かるように、縦と横のつながりを作るために有効であった。
- ・野外炊事やプログラム企画の満足度が高かった。「普段使わないような薪で火をたいたり、かまどでご飯を炊いたりなど花山ならではの体験ができた。それに同じ班の人と協力し、コミュニケーションが取れて嬉しかった。」「プログラムの企画立案がこんなにも難しく、また面白いものだとは知らなかった。」との声があり、体験的な活動を通して、自然体験の楽しさや活動の意義を感じさせることができた。
- ・今後のボランティア活動に前向きな参加者は97.2%であった。「先輩方の話を聞いてこれからのためにも参加したい」「レクリエーションの企画を通して、運営する楽しさを学んだ」との感想があり、実際の活動がイメージできるようなプログラムにしたことで、ボランティア意欲を高めることができた。

(4) 課題

- ・募集定員を下回る申し込み状況であった。近隣大学や高校と連携したり、広報活動の仕方を改善したりして、参加者を増やしていく必要がある。
- ・継続的なボランティアを育てるために、年間を通して先輩ボランティアが後輩ボランティアを育てる仕組みづくりを行っていく必要がある。

担当：企画指導専門職 渡邊愛